

創世記1章－2章3節 「神のご計画全体の苗床」

1A 神の光 1－5

2A 大空、陸、植物 6－13

3A 空の徴、海空の生き物 14－23

4A 陸の生き物 24－31

5A 神の安息 2:1－3

本文

みなさん、おはようございます。今日、私たちは礼拝と午後のセミナーにおいて、創世記の初めの部分を見ていきたいと思えます。みなさんの多くの方が、聖書の初めですから、創世記はお読みになられたと思えます。今回のセミナーでは、その創世記を神さまの救いのご計画全体の中で見ていきたいと思えます。1節には、「初めに」という言葉から始まります。旧約聖書の元々の言語はヘブライ語ですが、その題名は創世記ではなく、ここに出て来る「初めに」というのが題名です、「ベレシート」と言います。私たちは、全てのことの初めを見ていくこととなります。創世記は、聖書全体の「苗床」と呼ばれています。苗を植えて、作物を育てる時の苗床です。神の真理について、そのご計画についての始まりが書かれています。天地の初め、人の初めだけでなく、結婚の始まりがあります。罪と墮落の始まりがあります。その罪を赦し、ご自身に人を戻す神の贖いのご計画の始まりがあります。そして、神の裁きの始まりもあります。そして契約の初め、そしてイスラエルの選びの始まりがあります。

苗床ですから、そこから芽が出て茎が出て、葉が出てきて、そして実を結ばせます。ですから、始まりについて語るのですが、実は今の私たち、そして終わりの日にまで至る神のご計画そのものを眺めることができます。これが聖書を読む時の姿勢ですね。一つ一つの書物を別々に読むのではなく、一つの神のご計画、流れがあり、体系があり、そこから私たちが主を知るということです。復活されたイエス様が、エマオに行く途上の弟子たちに対して、「イエスは、モーセおよびすべての預言者から初めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。(ルカ 24:27)」とあります。そして、パウロは、エペソから牧者たちを呼び集めて、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。(使徒 20:27)」

1A 神の光 1－5

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

聖書で、最も、最初のことを書いているのはどこか？という質問があります。最初は、実は創世記ではありません。ヨハネによる福音書 1 章です。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともに

あった。ことばは神であった。」このことばは、イエス・キリストです。神は初めからキリストと共に
られて、そしてある時点で天と地を創造されました。ですから、初めの時から神はキリストにある計
画を持っておられたのです。そして、「天と地を創造した」とありますが、ここの「創造した」は「バラ
ー」です。「バラ」は無から有を造ることを意味します。私たち人間はすでに存在する原料を使っ
て、何かを造ることはできますが、全く存在しないところから何かを存在せしめることは、神のみに
しかできない業です。この新しい創造を、神は私たちに下さいました。使徒パウロは言いました。
「だれにもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。(2コリント 5:17)」無から有
を生じさせる力で、神はイエス様を死者の中から甦らせ、そして私たちにキリストの復活の命によ
って、新しくしてくださいます。

1:2 地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。
1:3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。1:4 神はその光をよしと見ら
れた。そして神はこの光とやみとを区別された。1:5 神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と
名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第一日。

混沌(あるいは茫漠)としているところから、形あるものを創造していかれています。ここに既に、
神の贖いの原型が組み込まれています。罪はアダムによって入るので、まだ罪なき状態でありま
す。したがって、罪によってこの茫漠が始まったわけではありませんが、新約聖書ではこの出来事
を、「暗闇の中から光に移された」救いの出来事の原型として引用しています。「2コリント 4:6「光
が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の
栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」

神の創造の行為が始まる前に、虚無があります。生きている意味が分かりません。神の裁きの
中には、「永遠に廃墟」というものがあります。何も無くなります、そこは時間が止まったようになっ
ています。命というものを感ずることができません。何も無い状態です。しかし、数多くのものがあっ
ても、生きている意味が分からない、何も無いという思いは、人が神を認めないところには存在す
るのです。伝道者の書の始まりは、「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、ど
んなに労苦しても、それが人に何の益になろう。(1:2-3)」とあります。

そして、闇があり、「大いなる水」があるとあります。闇は、悪を象徴しています。聖書で「闇」が
出てくれば、それは悪を行なっている者の姿を表しています。そして水ですが、深い海というのは、
すべてのものを吸収し、すべてのものが沈んでいく深い淵の象徴でもあります。聖書は、その奥に
ハデス、死者の住まう所があり、また罪が葬りさられるのも海の底であるとあり、そしてレビヤタン、
海の巨獣もそこにおり、荒々しい海は、騒々しくする国々の姿としても描かれています。

しかし、希望がそこにあるのです。「神の霊は水の上を動いていた。」とあります。興味深いこと

に、神はヘブル語で「エロヒム」であり、複数形になっています。いや、**単複形**になっています。「一つの手」と言う時の「一つ」には、五本の指があります。単数の中に複数が一体になっている状態です。同じように神は、三つの人格があるけれども一つであられる方、三位一体の神であります。父なる神、子なるキリスト、そして聖霊なる神です。ここでは、神の霊が動いておられます。そして、神が言葉によって光を造られます。ここに、子なる神、キリストがここにおられます。イエスは地上に再臨される時、「神のことば」と呼ばれます(黙示 19:13)。

イエス様が、ニコデモにお話しになられました「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができますでしょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。(ヨハネ 3:3-6)水があり闇の中に生きていきたく私たちに神の霊が働かれると、人は生きることができ、神の国に入ることができ、光の中に入れられます。

ところで、「光」ですが、四日目に初めて、太陽と月、そして星の姿が出てきます。その前に光があります。これは、神の栄光の光であります。太陽を造られる前に、すでに持つておられる光を造られるのです。ともしびがないのに光っているところが、神の幕屋にはありました。至聖所です。そこは、ともしびの光がないのに、契約の箱の上、贖いの蓋の上は光っていました。神ご自身がそこにおられるからです。そして、すべてのものが新しくなった、新天新地において、その都には太陽も月もない、とあります。それは神と小羊イエスの光があるからだ黙示録 21 章にあります。

ちなみに、新天新地には、海もありません。海は、死とハデスと共に葬り去られたことが黙示録 20 章の最後に書いてあります。創世記 1 章の始まりは、黙示録の最後 21-22 章と共に読むといいです。神が創造されたところから、人が落ちてしまつて、その最低部分にキリストの十字架があり、そして復活によって回復が始まり、最後に完全に回復した姿をみることもできるのです。

「神はよしと見られた」とあります。神のみが善であられ、ご自身の造られたものを善とみなしておられます。そして主が、ご自身が造られたものを喜んでおられます。子供が何か粘土やプラモデルを作って、できあがるのをみてうれしいでしょう、そのような感じです。つまり、神はあなたを喜んでおられるということです。ご自身の造られたものを神は憐れみ、喜んでおられます。そして、「神は光とやみを区別された」とあります。形がなかったところに、形を造られています。区別をされています。神は区別される方です。秩序を造られている方です。そして、神は救いにおいても区別を行われます。イスラエル人がエジプトに居る時、神がエジプトに災いを下すも、神はイスラエル人を区別し、エジプトにだけ災いが下るようにされました。

さらに、「神は光を昼、やみを夜と名づけ」られました。名前を付けることは、支配あるいは管理の能力が必要です。名を付けることによって、神がそれらを支配していることを示しておられます。「名」というものは、聖書では本質を表します。単に「神」ではなく、「神の名をほめたたえる」のです。イエスの御名によって、使徒たちは足のきかない人を立ち上がらせました。名というものに、本質がありますが、名づけるというのは支配や管理を示しているのです。

そして、「夕があり、朝があった」とあります。一日の始まりです。ユダヤ人たちは、この表現をもって夕を一日の始まりと考えます。したがって、日没から新しい日が始まります。彼らの休日は土曜日ですが、実は土曜の日没から活動を開始します。すでに日曜日だからです。

2A 大空、陸、植物 6-13

1:6 ついで神は「大空よ。水の間にあれ。水と水との間に区別があるように。」と仰せられた。1:7 こうして神は、大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを区別された。するとそのようになった。1:8 神は、その大空を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第二日。

水が地の上にあるだけのところに、大空を神は造られました。「大空」という言葉は、「引きのばす」という意味があります。「天を造り出し、これを引き延べ、(イザヤ 42:5)」とあるとおりです。そして大空の下には水があり、これは後に海となります。けれども、上にある水もあります。雲などの水蒸気が今でも空の上にあります。後に、ノアの日には洪水が起こる時に、「天の水門が開かれた。(7:11)」とあります。したがって、この大空の上の水というのは、今の雲以上の水の集まり、水の層のようなものがあったのかもしれませんが。かなり、今の私たちの地球環境と異なっていたことでしょう。

そして、これを「空」と名づけておられます。聖書には、多くが「天」が複数になっています。創世記 1 章 1 節もそうです。「空」と呼ばれるものがここにありますが、そして「空中」と呼ばれる天使などの活動する空間があり、そして神の御座のある「天」があります。パウロはこれを「第三の天」と名付けましたが、主の御座があり、そこは天地が過ぎ去ってもなおのこと残っている天です。天のエルサレムは、そこから新天心地に降りてきます。そして、「夕があり、朝」がありました。第二日目が終わります。ここで、主が、「これをよしとされた」という評価が出てきません。おそらく、次の三日目に神の行なわれることを意識して、ここではまだ終わっていないという思いを強くしておられたのではないかと思います。そこですぐに三日目に入ります。

1:9 神は「天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:10 神は、かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、それをよしとされた。

第四日目には、大空の下にある水が一つの所に集められます。そして、乾いたところができ、そこが陸になります。水を海と名づけ、乾いたところを陸と名づけられます。この時は、もっと単純な大陸だったと思います。後にノアの洪水で地殻変動が起こり、またペレツの時代に地が分かれた、とありますので、その時に今のような大陸に分かれたのではないかと思われます。そして、ここで神は、「それをよしとされた」と言われています。

1:11 神が、「地は植物、種を生じる草、種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ果樹を地の上に芽生えさせよ。」と仰せられると、そのようになった。1:12 それで、地は植物、おのおのその種類にしたがって種を生じる草、おのおのその種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ木を生じた。神は見て、それをよしとされた。1:13 こうして夕があり、朝があった。第三日。

三日目には、神はもう一つの創造をされています。(同じように六日目に神は二つの創造をされます。)神が陸に植物を造られました。植物というのは、草とか穀物のことです。種を生じる草とは、野菜類のことです。そして、実を結ぶ果樹はそのとおり、果物のことです。そして主は、「種」という手段によって自ら増え、生えていくようにされました。この神の創造も、私たちは神の救いにおいて行ってくださいます。「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。(1ペテロ 1:23)」そしてイエス様は何度も、私たちが神の畑のようであり、私たちが多くの実を結ばせると約束されました。

ここで神が強調されているのは、「おのおのその種類にしたがって」ということです。これが、後に水や空の生き物にも、そして動物にも出てきます。事実、今、種類ごとの生き物で満ちています。もちろん馬と驢馬によって騾馬が生まれたりしますが、大まかな種類は決まっています。このようにして神は、それぞれの種類を区別しておられます。同じ神によって造られたのですから、もちろんそれぞれは似ています。けれども、区別があります。それを東洋思想は、輪廻転生で人が獣になることもあり得る、種類が変わることを教えます。そして神を否定してキリスト教の世界で造られたのが、進化論です。これは、科学というよりも哲学です。元々、自然科学というのは哲学の一つでありましたから、当然と言えば当然です。一つの種から何億年もかけて別の種になるのであれば、中間種というものが出来て来ておかしくないのですが、それは見ません。

そして神の区別は、いろいろな秩序の中で見ます。モーセの律法の中では、ぶどう畑に二種類の種を蒔いてはいけない、羊毛と亜麻布の糸を混ぜて織ってはいけないという戒めまであります(申命 22:9,11)。神が区別する神であることを私たちは知ります。ですから、次に動物と人間が区別されています。2章に出てきますがその土台になっているのが男と女の区別です。それを一つにすることを神は、絶対にやってはいけないことだと話しておられます。

こうして、神は形を作ってくださいました。そして神はこれから、その形ある所に有を造りだしてい

かれます。ちょうど、家の枠組みを建設したけれども、その内装を開始するような感じです。意味あるものを造られます。2 節に「何もなかった」とありますが、有るようにして下さるのです。そのことによって、創造に意味を持たせます。

3A 空の徴、海空の生き物 14-23

1:14 ついで神は、「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。1:15 天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:16 それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。1:17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らせ、1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神は見て、それをよしとされた。1:19 こうして夕があり、朝があった。第四日。

四日目は、一日目の「光があった」を見ればよいです。五日目は二日目の大空を、そして六日目は三日目の陸を見ると良いです。このように対応しています。四日目は、「光る物」が造られています。しかし、光そのものは一日目に造られました。けれども神は敢えて、日、月、年という時のしるしを生み出すために、光る物を造られました。つまり太陽、月、星です。

これらによって、私たちは時のしるしを知ることができます。ユダヤ人たちは、例祭といって、年ごとに祭りを七つ持っていました。そして新月の祭りを、毎月の第一日に持ち、安息日を七日毎に持っていました。これらによって、神に礼拝を捧げていました。そして神は、天体の運行によってご自分の栄光を示されます。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。(詩篇 19:1-2)」私たちは時間が与えられ、季節が与えられ、そして年が与えられることによって、その周期の中で私たちは生活のリズムを得ることができています。

そして私たちは、これら時や月、季節というものを造られた神、つまり、これらの時間の制約を超えたところの神を信じています。つまり永遠の神です。永遠とは、いつまでも今の時間が続くことではありません。むしろ、今の時間という制約を超えているのが永遠です。神と主イエスはご自身を、「昔いまし、今いまし、やがて来られる方」と言われました。神がおられるということは、時空を超えています。ですから、私たちは永遠の命を得ています。時を超えて、今、永遠の救いの保障を得ています。救われた、と私たちは言えるのです。エホバの証人に尋ねてください、「あなたは救われていますか?」と。すると、死ぬまで分からないというような答え、あるいはあやふやな答えを出すでしょう。将来のことなど、分からないからです。しかし私たちは、救われましたと完了形で話せるのです。なぜなら、永遠の神の救いを受けたからです。罪の赦しも永遠の赦しであり、過去のこと、今も、将来犯すかもしれない罪もすべて赦されたのです。永遠の救いも、これから神から離れ

るといふことは決していないのだという救いです。

時が越える新しい秩序に入る時がきます。それは新天新地です。新しいエルサレムです。そこには太陽や月、星がありません。神と小羊の光があるだけです。そこは永遠です。そこにある光は、神ご自身の栄光、第一目の光、至聖所の光での輝きであります。地上での神の国では、キリストが王の王として君臨される時、太陽の光、月の光は七倍になりますが、それでも太陽と月がありません。しかし新しいエルサレムにおいてはあります。終わりになるにつれて、神のオリジナル、初めの姿へと戻っていく、回帰していくのです。

1:20 ついで神は、「水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の大空を飛べ。」と仰せられた。1:21 それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた。1:22 神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」1:23 こうして、夕があり、朝があった。第五日。

五日目に、二日目に主が造られた大空に、また海に、生き物を造られました。ここでも、植物の時と同じように種類にしたがって造られています。さらに、ここでの祝福は植物と違って、卵によって増え広がるように神が命じられています。ここで聖書の中で初めて、「祝福(バルク)」という言葉が出てきます。聖書に出て来る初めの言葉を知ることが大事です、その初めに使われた意味や文脈が今後の同じ言葉にも影響を与えるからです。ですから、祝福、バルクと聞いた時に、それは主が良しとされるだけでなく、豊かにしてくださる、増やしてくださるという意味合いがあります。

この祝福が発展します、主は人を造られて、祝福されたと六日目に言われます。さらに七日目に、安息日を聖なるものとし、祝福されます。しかし、アダムが罪を犯し、地が呪われたものとなりますが、ノアの時代に神はやり直しを与えられ、ノアの家族や、箱舟に乗っていた動物たちに再び祝福されます。そしてついに、その祝福はとこしえに変わらぬものとして約束してくださいます。そうです、アブラハムに対してです。彼を無条件に祝福し、「すべての民族は彼によって祝福される」としていただきました。そしてついに、キリストにあって神の祝福は実現するのです。「そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。(ガラテヤ 3:9)」キリストを信じる者は、神が初めに意図された祝福を受けるように召されたのです。

そしてもう一つ、お話ししたいことは、神が海に生き物を造られる時に、「海の巨獣」を造られています。この巨獣のヘブル語では、他の箇所「蛇」「竜」と訳されており、レビヤタンと並んで出てきます。例えば、「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。(イザヤ 27:1)」とあります。そうです、私たちはヨブ記で学びました、海にいる第一の獣がレビヤタンであり、海の巨獣であり、竜でありました。なぜここで、

主が海の巨獣に言及されているのかは、3章に出てくる蛇のことを意識しておられるからだだと思います。神は海の巨獣を初め良く造られました、その中でサタンが入るようにされました。そして黙示録 11章において、竜、蛇が同列に出て来ます。「こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。(11:9)」

4A 陸の生き物 24-31

1:24 ついで神は、「地は、その種類にしたがって、生き物、家畜や、はうもの、その種類にしたがって野の獣を生ぜよ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:25 神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。

六日目です。三日目に造られた陸において、神は初めに動物を造られました。そして、次に人を造られます。動物ですが、興味深いことに神は生き物を造られるときに、初めから「家畜」を造られています。すべてが野生だったのではなく、初めから、人が飼うべき動物を造られているのです。なぜか？それは、後に生贄としてこれら家畜が活躍するからです。主に捧げるもの、身代わりに死ぬもの、その犠牲を神は心に留めておられるのでしょうか。獣であれば、価値がありません。自分が所有する、飼っているものだからこそ、それを捧げる時の代価を知ることができます。主がそして、「這うもの」ということで別途に神は言及されています。これもまた、私は3章の蛇を、神は這うものと同じようにされました。

主は三日目に、二つを、すなわち海と陸の他に、植物を造られましたが、同じように六日目に神は二つを造られます。動物と人です。動物は他の生き物の中では人に最も近い、動物です。似た部分が多いです。そこで多くの者が人間は動物の一種であると言います。いいえ、決定的に違うのだということを次から教えます。

1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。1:27 神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。

ここで、「われわれに似せて」と神が言われていることに気をつけてください。私たちはこれを、三位一体の神の現れであります。神というヘブル語自体が、エロヒムという複数形です。三つの人格のある、ひとりの神です。したがって、神はご自身の創造を、三つの人格の協働作品として行われていることを強調しているのです。このことを考えますと、私たちは驚くのです、イエスがお生まれになり、バプテスマを受けられた時、ひとりの神は三つの人格で現われたということです。「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のよう

に下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:16-17)」

イエスが来られたことは、まさに三位一体の神が、罪の中に死んでしまった人々を、再びご自分のかたちに引き戻す働きだったのです。われわれに似せて、われわれのかたちにと言われた方が、永遠の御霊によって、キリストが自身の血を父なる神にささげ、我々を新たに神のかたちに戻してくださいました。そして、神ご自身の中で愛の交わりがありました。父なる神が子を愛され、子は父に服されました。そして聖霊は父と子から遣わされ、子を証しするために私たちのところに来てくださいました。この交わりの中に私たちを招いてくださいましたのです。神のかたちに造られたというときに、このような神の中にある愛の交わりに招かれているということです。

1:28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」1:29 ついで神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食物となる。1:30 また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」すると、そのようになった。

神は改めて、男と女に造られた人に祝福命令を与えられました。まず、「生めよ、ふえよ。」であります。男女の性のつながりを神は祝福する命令として与えておられます。交わりが、神の三位一体の本質です。そして、子を産むことについても神は力を入れておられます。なぜなら、救いも女が子を産むことによって与えられるように神は定められたからです。アブラハムの子孫から救いが来るようにされ、その契約の印は割礼、すなわち男の子種だったのです。

次に、「地を従えよ」であります。これが人間の神の形の存在をよく表しています。神は人によってこの地を支配されようとしています。神に支配される人、神に拠り頼む人がおり、その人が神と交わって一つとなっているところで、神の支配が地上に及ぶのです。これも人の罪によって被造物がうめきの中に入ってしまった。しかし、キリストが来られて贖われた者たちが、キリストと共に地上に戻ってくる時に、自然界も解放の中に入れられて、元の姿に回復します。私たちは、キリストと共に王として、祭司として、御国を統べ治めることとなります。

そして次に、食べる物についての規定ですが、当時は植物のみが食べるものでありました。肉を食べるようになるのは、ノアの時代の洪水の後からです。家畜は、食べるためではなく、いけにえとして捧げられます。そして動物も植物のみを食べます。地上の神の国では、獅子も草を食べるようになることを、イザヤは 11 章で預言しました。

1:31 そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。こうして夕があり、朝があった。第六日。

主が全てを造られ、人を造られて、「見よ。それは非常によかった。」とご自身で感動しておられます。これが、人の生きている意味です。すべては神の栄光のためです。すべては、神が成されていることを私たちが、また自然がほめたたえます。天体も、山々も、動物も、木々もみな、主の御名をほめたたえます。その中で、ご自身が愛してやまない、誉れと冠をかぶせてくださったのは、我々人間なのです。

5A 神の安息 2:1-3

2:1 こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。2:2 それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。

2:3 神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

第七日目は、主は休まれました。私たち人間が休む時は、疲れているから休むのですが、神は疲れることはありません。ここの「休まれた」というのは、天地創造の働きが完成したので、それ以上、付け足すことはないからです。ご自分が完成された業を見て、それでそれを祝福しました。したがって、完成されたところに留まる、休むということはとても大切です。私たちは、あくせく働いています。すると、何か自分が成し遂げなければ物事が成り立たないという錯覚に陥ります。そこで、立ち止まる必要があります。実は、すべてのことは神が動かしておられて、私たちは神の中で動いているだけ、生かされているだけであることを知ります。それが聖なる営みであり、神はこれを聖とされているのです。私たちは聖めについて、何かを行うことだと勘違いするでしょう、しかし、主の御業を認めること、その恵みを知ること、自分は神に生かされていること、神が働いておられることをただ信じること、それが聖なる営みなのです。

しかし、人が根本的に休むことができなくなったのは、罪を犯したからです。罪があるために、心が静まることができなくなりました。しかし、神はこのことについての休みを与えてくださいました。イエス様が十字架の上で死なれる時に、「完了した。(ヨハネ 19:30)」と言って死なれました。救いのために必要なことは、すべてイエス様が行なってくださったのです。そして主は、私たちに魂の安息の場を与えておられます。主ご自身です。そして天です。そこに入るまでは、労苦があります。忍耐があります。しかし信じるのです、既に主が与えておられる安息に留まり、そして究極の安息である天に向かって走るのです。「ヘブル 4:11 ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落伍するような者が、ひとりもないようにしましょうではありませんか。」